ゆうあい通信　第404号

2025年(R7) 11月10日

発行所　石 井 記 念 友 愛 園
〒884-0102
宮崎県児湯郡木城町大字椎木644番地1
☎0983-32-2025　E-mail yuuaisya@kijo.JP

岡山研修旅行2025

園長　児嶋　草次郎

10月も終り近くになり、急に晩秋を感じさせられるような天気となって来ています。空気もひんやりとして、窓辺の風鈴の音も、冷たく金属的に耳に響きます。鈴なりの柿の実は、次々に地面に落ちて、熟した匂いをあたりに発しています。マリーゴールドやフヨウもあわてて花をつけ始めています。雨も降って、畑の大根、キャベツ、白菜等もその成長に勢いをつけています。

朝早く起きても、夜明けは遅くなり、無駄にあたりを散策する時間が多くなっています。今年は、イチョウも栗もドングリも、けっこう多くの実をつけており、東北地方の熊の出没が気になります。木の実が不作というより熊の個体数が増えすぎているのではないのか。

今年の９月10月の夏のように暑い秋を思い返す時間も多くなって来ていて、今、10月上旬に行った「岡山研修旅行」について頭の中で整理しています。今年は、石井記念友愛社創立80周年ということで、後援会「石井十次の会」の皆様と石井記念友愛社の職員との交流を兼ねた「岡山研修旅行（２泊３日)」を企画し、無事に終ることができました。秋の日はつるべ落とし。早く文字にしておかないと、遠い昔の話となってしまいそうで、今回は、この旅行について書かせていただきます。

A班（９月30日～10月１日）とB班（10月６日～10月８日)、二グループに分けて行いました。A班が40名、B班が37名で、そのうち10名ほどが後援会の方々です。私は案内役として、どちらにも参加し、それぞれの方々と交流させていただき楽しむことができました。

朝７時50分頃、大型バスを貸し切って友愛社資料館前を出発。高速道路を北上し、10時半頃大分県臼杵港に到着。フェリーで四国八幡浜港に渡り、またひたすら高速を北上し、瀬戸大橋を渡って岡山市内のホテルに着いたのは夕方６時頃でした。友愛園の高校生たちとの自覚旅行では、何度もこのコースを通っていますので、私は慣れていますが、初めての方は、約10時間のバス旅行は疲れたことでしょう。しかし、バスの中では、自己紹介をしたり、石井十次映画「石井のおとうさんありがとう」を鑑賞したり、ゲーム等をしたりでけっこう皆さん楽しく過ごされていました。その日の夕方は、岡山駅前の居酒屋でみんなで懇談会もしました。友愛社の職員たちは、他施設の職員たちと、ましてや後援会の方々と歓談する機会はそうありませんので、貴重な交流の機会となりました。

２日目が本来の研修で、朝７時半頃バスでホテルを出て、門田屋敷の岡山孤児院のあった三友寺前を通り、まず、上阿知の大師堂へ行きました。今では、私たちにとってここが岡山孤児院発祥の地となっています。何度訪れても、なんだかなつかしく、魂が癒される場所です。２回とも地元の「石井十次に学ぶ会」の会長で、友愛社の後援会の会員でもあられる東森貢様を初め、10人弱の方々が出迎えてくださり、説明等してくださいました。まるで隣町の友人たちとの交流のようなあたたかさで、今回参加した職員たちも後援会の皆さんも、そのなごやかさにびっくりされたのではないかと思います。

次に倉敷美観地区へ向い、まず大原美術館・児島虎次郎館で絵画鑑賞。残念ながら、A 班グループは、ちょうど企画展の準備ということで、大原美術館には入れませんでした。しかし、この春新装オープンした児島虎次郎館は特別に見せていただき感謝でした。石井十次、大原孫三郎、児島虎次郎三人の友情関係

については、バスの中で映画を見たり、三人の関係ついて触れた過去のテレビ番組の録画を見たりしていますので、予備知識は充分に持って臨むことができたと思います。

大原美術館から歩いて５分の加計美術館では、昔、高鍋町立美術館で個展をされたことのある増田常徳氏の個展を、館長である私の兄塊太郎氏の説明で鑑賞することができました。実は、増田氏は石井十次の肖像画を描いてくださっており、そのことが御縁でこの度加計美術館で氏の個展をすることになったのです。今回の研修旅行がこの個展と重なったのは偶然でしたが、私には、そうは感じられず、お導きだと思いました。

そして、午後からはそれぞれ二グループに分けて時間をずらし、倉敷中央病院の見学でした。私は「病院の中に町がある」と表現するのですが、医師のだけで約 500 いる巨大病院です。40 人の団体がゾロゾロと院内を歩き回ると、患者さんや御家族に迷惑をかけるということで、二グループに分けたのです。病院のスタッフの皆様には大変御迷惑をおかけいたしました。

それが終ったら、それぞれに倉敷の町を散策し、また土産を買って、夕方また同じ岡山市内のホテルに泊まりました。この夜は、それぞれ気心の知れたグループごとに夕食をとりました。

３日目は、７時半前後にホテルを出て、今度はひたすら南へ向けてバスを走らせ、同じコースを通って帰宮しました。以上、ごく簡単に工程について書かせていただきました。以下は、思いつくままに、私自身の感想を記しておきます。

（１）前回の研修旅行もそうでしたが、私はバスが友愛社を出発してすぐ、挨拶がわりに、職員たちに三つの課題・宿題を出しました。高いお金を使っての研修であり、後援会の人たちとは立場が違うという自覚を持って参加してもらわねばなりません。

①文化の移入に関して

その町で独自に生まれ育つ文化というのはそうありません。倉敷は小京都とか言われますが、昔、京都に行った金持などが、かなり文化を取り入れていると思います。石井記念友愛社の園庭に花を植えるという文化は、もう独自のものとして発展しています。実はこれは児嶋が実習した、「北海道家庭学校」から取り入れたものです。

昨年、新築した石井記念明倫保育園の室内庭園にバナナとパイナップルを植えて成長し、この夏に実をつけて、子供たちが食べています。石井記念友愛社の運営する保育園を改築する度に、バナナを植えて来ましたが、ようやく成功した感じです。保育園の園長や職員たちは、児嶋の個人的趣味でやっているのだと思っていたのでしょう。しかし今回倉敷中央病院を見たら、その考えが変るでしょう。虎次郎が設計した噴水も今も残っています。なぜ病院内に植物が必要なのか。それは、マイナスの気を植物が吸収してくれるからです。倉敷の町を歩きながら、他に移入すべきものはないか、捜してほしい。

②人の和・輪・環に関して

事業は人の和・輪・環だと思います。石井十次、大原孫三郎、児島虎次郎を中心とした人の和・輪・環が、岡山孤児院を一流のものにし、美術館を生んだりしている。それからもう 100 年以上の年月がたっています。孫・曾孫の代になってもその縁が続いていることは奇跡です。この我々の事業を今後も存続させていくためには、今後どう発展させていくべきなのか考えてみてほしい。縁を切るは簡単だけど、存続させていくのはむつかしい。

③今後どう人材を輩出していくのか

先月の「友愛通信」で、石井十次は突然変異ではない。「高鍋バンド」的な和・輪が高鍋町内にできていて、そのエネルギーが石井十次を生んだと書きました。他にも色んな人材を輩出しました。私たちは養育・保育・教育・支援に携わる者です。再びそのような人材を輩出しようとする時、それぞれに与えられた場

で、どのような養育・保育・教育・支援が必要なのか。岡山の地から、はるか宮崎を望みながら考えてみてほしい。インスピレーションが働くかもしれない。今の世間の人たちと同じようなことをしていても、特別の人材は育たない。

こういう問いかけがどれほど職員たちの心にひっかかったかは分かりませんが、何かの機会に思い出しながら、考えを深めてくれればと願います。声かけがなければ人は動きません。

（２）今、マイナスの気を植物が吸収してくれると書きました。どこかに書いてあったと思います。この言葉を反芻しながら、今回の旅行で考えを深めることができたような気がします。これも偶然ではないと思うのです。今回の旅行に私は、植物に関する本を２、３冊持参しました。その一冊が「植物は＜知性＞をもっている」（ステファノ・マンクーゾ＋アレッサンドラ・ヴィオラ）です。何度か　読み返していますが、この内容が今回の思いに答えてくれました。

私たち人間は“万物の霊長”とうぬぼれていますが、人類（ホモサピエンス）がこの世に現れたのは 20 万年前だそうです。それに比べて、植物の歴史は 30 億年だそうです。全然桁が違います。植物は動物とは違った方法で進化し、この地球上を支配しているのは、実は植物なのだそうです。「地球上で生きている多細胞生物の総重量を 100 とすると、多少の変動はあるが、植物の総重量はそのうちの九九・五～九九・九にあたる」。人間がせいぜい 100 年くらいしか生きれないのに、植物の木には 1000 年以上生きるものがある。これもすごいことです。

今回私が注目したのは、人間は五感（視・聴・嗅・味・触）しか持っていないのに、植物は 20 くらいの感覚を持っていると書いてあるところです。先ほどマイナスの気を植物が吸収すると書きましたが、おそらく気をとらえる力も植物は持っていると感じます。私たちは花々を見て「癒される！」などと勝手に言いますが、そう感じた時には、実は私たちに取りついている、あるいは取りつこうとしているマイナスの気を吸収してくれているということではないのか。友愛園で一所懸命花を育て、１年中花を欠かさないようにしているのは、今まであまり意識してなかったけど、実は、子供たちに取りついているマイナスの気を吸い取ってもらおうと本能的にしていたのではないかという気もして来ます。そう考えれば、私の仕事部屋の窓辺にたくさんの植木鉢を並べているのは、職員や子供たちのグチや不満のエネルギーが侵入しないように防御しているということにもなります。

友愛社内には巨樹が何本も生えています。方舟館前のイチョウの大木は、防風林としてしか今まで見てこなかったけど、この大木が地中から大量のプラスの気を吸いあげて、この園内いっぱいに発散してくれている、そういう目でもこれから見上げていきたいと思います。

（３）私は朝早く目が覚める習慣を持っていますので、今回ホテル周辺を歩いてみることにしました。そして、新たな発見をすることができました。岡山市内のホテルに泊まることができたことが幸いしました。まず、A 班で行った時、９月 30 日の朝に近くのコンビニで「岡山県道路地図」を買い、岡山駅と、岡山孤児院のあった門田屋敷を調べました。すると、なんとホテルは駅と孤児院跡とのだいたい真中あたりにあったのです。駅までの距離は１Ｋｍちょっと、孤児院跡までは１Ｋｍ半くらいです。

10 月 1 日早朝、私はホテルを出て、真東に向かって歩きました。旭川にかかる新京橋のところで、朝の太陽が操山（みさおやま）の向こうから顔を出しました。石井十次や当時の子供たちも仰ぎ見た太陽です。橋の中ほどまで歩き旭川を見下すと、鏡のように水面は静かです。水鳥が３羽滑るように泳ぎながら魚を取っています。くちばしの長いところを見ると鵜（う）のようです。鳩の群も周辺を飛んでいました。空は雲一つない晴天でした。どこに船着き場があったのかは分かりませんが、確かにここから、子供たちは小船に乗って九州宮崎へ出発したのです。

Ｂ班の時は、10 月 7 日の朝に岡山駅まで歩いてみました。ムクドリの群が駅前の街路樹の中で騒いでい

ました。再開発をしているようで、桃太郎の像は取り外され、駅の建物側に仮置きされていました。岡山孤児院の古い写真の中に、岡山駅前で演奏する少年音楽隊を写したものがあります。子供たちの孤児院から楽器を抱えて歩く姿がイメージできました。

10 月 8 日の朝には、岡山城の見える場所まで歩いてみました。新京橋から川添いに北上し、京橋、相生橋まで来ると、あの烏城と言われる黒色のお城が望めました。後楽園も含めて、岡山孤児院から１Ｋｍちょっとでしょう。子供たちが後楽園で遊んだという記録もどこかで読んだ気がします。

ここからが新発見です。今の時代の感覚で言えば、岡山孤児院は、都会の真中にあります。文化的にも恵まれているし、交通を考えても非常に便利な所です。なぜこんなところを捨てて、500Ｋも離れた宮崎の山中に移住しなければならなかったのか。今回、歩いてみて、石井十次のやったことがいかに無謀な挑戦であったかが感覚で分かったような気がして来ました。

文明・文化を捨てて、なぜ宮崎茶臼原へ施設を移転させたのか。その疑問にはやはり岡山市内に立ってみないと答えをイメージできない。大自然の教育効果を考えたのだ、実感としてそう思えてきます。

石井十次は“脳病”と表現するのですが、21 歳の医学生の頃、その強いノイローゼ状態を療育するために、上阿知村の診療所で実習を行います。そこであたたかい村の人々と交流し、また孤児たちとも出会って、人生の転機となります。

私は今回も研修の皆さんに、生まれ故郷宮崎の馬場原の自然風土に似ていると説明したのですが、石井は同じ気が漂っていることを本能的に直感したのではないか。言葉では表現してないけど、大自然の気の流れをとらえる第六感みたいなものを持つ人物であったのではないかと、最近感じるようになっています。岡山から宮崎に帰る度に、宮崎高鍋の大地の大気に『帰って来い、帰って来い』と呼びかけられていたのでしょう。

Ａ班Ｂ班とも、帰途、四国から九州にフェリーで渡り、高速を走るバスの中で、一人ひとり自分の感想を述べていただきました。それぞれにとらえ方は多少違うかもしれないけど、石井十次の描いた理想郷作りがいかに壮大なものであったか、岡山の地に立ってイメージすることはできたのではないかと思います。その理想郷作りは、没後 110 年が過ぎても、まだ、進行形なのだ、良き新たな人材を育てるために、みんなで力を合わせていかねばならないと、改めて感じることができました。色々とあたたかく迎えてくださった岡山、倉敷の皆様、そして今回同行くださった「石井十次の会」の皆様、ありがとうございました。